

秘密捜査網

残酷にそして華麗

創芸社

秘密捜査網

残酷にそして華麗に

昭和五十五年六月一日 初版印刷

昭和五十五年六月十日 初版発行

定価 一〇〇〇円

著者 菊村 到

発行者 石川 司 朗

発行所 株式会社創芸社

東京都千代田区神田神保町一―三四

東京弘報ビル

電話 (〇三)―二九三―七四四一

振替 東京六一―一〇八四

印刷 曉印刷 製本 若林製本 ©一九八〇

「秘密捜査網」 目 次

残酷に、そして華麗に	5
ベイ・デイに消えた	25
霧の中の視線	45
花は血にひらく	67
そして血が匂う	87
死は闇に溶けこむ	107
花は濡れて散る	127
殺意は風にのって	147
戦いすんで夜がきた	167
真夜中に眠りはこない	189
あとがき	209

装
画
山
本
典
子

秘密捜査網

残酷にそして華麗に

残酷に、そして華麗に

毎週金曜日の朝、八時半には彼はテレビの前に置いた
イージー・チェアにゆったりと体を沈める。

もちろんテレビを見るためである。チャンネルをQTVに合わせる。月曜日から金曜日の午前八時半から一時間、QTVでは「おはよう、みなさん」というワイドショウを放映している。

金曜日には『フライディ・ドラッグネット』（金曜捜査網）というコーナーがある。犯罪、もしくは犯罪が絡んでいそうな事件を取材してリポートするのである。

リポーターは映画監督の江口武雄で、江口はデビュー時から高く評価されたが、映画産業が不振で減産体制に入ってしまったため仕事に恵まれず、テレビ映画のシナリオを書いたりして不遇な生活を送っていたところを、この番組のリポーターに起用されるようになってから、テレビタレントとして人気が出てきた、という男である。

『フライディ・ドラッグネット』の前には、歌が入る。その金曜日の朝、出演した歌手は青木みどりであった。青木みどりという名前は若々しい新人を連想させるが、現実の彼女は豊満な肉体を持った年増のベテラン歌手で

ある。

青木みどりが朝のワイドショウよりは深夜のナイトクラブのほうをはるかにふさわしい濃いメイクアップと、ぎんぎらぎんのドレスで、『あなた、今でも』というヒット曲を歌っているのを、阿笠礼太郎はイージー・チェアにパジャマに包んだ長身をゆったり沈め、紙ケース入りの牛乳をケースからじかに飲みながら見ていた。

青木みどりは肉がつきすぎて、体はだぶだぶだが、声にはしっとりとした艶があつて、中年男はもちろん、若いサラリーマンや学生にも人気がある。マザーコンプレックスの甘ったれヤングをしびれさせるだけの魅力を確かに彼女の歌は持っている。

しかし、阿笠礼太郎は何も青木みどりの歌を聞きたくて早起きしたわけじゃない。彼が見たかったのは、『フライディ・ドラッグネット』のほうである。

その朝の『フライディ・ドラッグネット』は、結婚の邪魔になるというので生まれたばかりの赤ちゃんを殺してしまった未婚の母の話を取りあげていた。

阿笠礼太郎は『フライディ・ドラッグネット』の取材メンバーの一人なのである。

阿笠はQTVの社員ではない。フリーの身である。十

人ほどのフリーのルポ・ライターたちが協力しながら交代で取材に当たっている。赤ちゃん殺しの母親の事件には阿笠はタッチしていない。

阿笠礼太郎はフリーのルポ・ライターで、目下のとこるQTVの『フライディ・ドラッグネット』の取材をメインの仕事にしている。丁度、三十歳になったところで独身である。表向きはルポ・ライターとなっているが、彼にはもっとべつの隠れた顔がある。

その隠された素顔を知っている人間は殆どいない。彼の前身は刑事である。

阿笠は国立大学を出ている。国立大学出の刑事ということで注目を浴びた。当人は学歴にはこだわらないつもりだったが、周囲はやはり少し違った眼で彼を見ていた。

尊敬の眼差しを向けられることもあったが、むしろやりにくい面のほうが多かった。

日本全国には十九万七千人の警察官がいる。最近では大学卒はそのほぼ半数近くを占めている。

しかし、阿笠が入った頃は大学出身者は全体の二割に満たなかった。

大学出が警察畑に入る場合、普通、国家公務員上級職

試験を受ける。これに合格すれば、じつにスムーズにエリートコースを進むことができるのである。国家公務員上級職試験にパスしていれば、初めから警部補になれる。一年経てば警部に昇進することが約束されているし、その二年半後にはもう警視の椅子が待っているのである。つまり三年半で警視になってしまいうわけだ。だが、阿笠はエリートコースを選ばなかった。

彼が出たのは英文科であり、在学中にやったことと言えば、語学の勉強だけだった。得意なのは英語とフランス語だが、イタリア語、スペイン語、それにドイツ語も一応、マスターしている。

彼がなりたかったのはサツのお偉方じゃなくて、刑事だった。犯罪や犯罪者たちとじかに取りくむ刑事の仕事に彼は情熱を感じたのである。

だから、国家公務員上級職試験なんか受けなかった。阿笠は、高校出の人たちと一しょに警視庁の採用試験を受け、巡査になった。

刑事はほかの分野に比べて昇進しにくい。昇進するためには、そのつど試験を受けるわけだが、刑事は仕事に追われて受験勉強をするひまがない。従って受験のチャンスを失い、昇進が遅れていく。

しかし阿笠は昇進なんか全く問題になかった。ひら
巡査のままでいいと思った。

名利を捨ててかけずり回っているうちに、いつか兇悪
犯の銃弾が刃物のために命を失うことになるかもしれな
かった。殉職してはじめて昇進する。それで結構だと思
っていた。

だから、恋愛はしても結婚はしないつもりでいた。女
房に悲しい思いをさせたくないからだった。

しかし結婚してしまった。美人じゃないが、明るい気
立てのいい丈夫な女房だった。年とった母親が結婚しろ
結婚しろとうるさく言うのに負けてしまったのである。

阿笠の母親は生け花の先生をしていて、お花を習いに
きている娘の中にとっても気に入った子がいた。その子と
結婚したのだった。

母親は、ほっとしたせいにか、阿笠が結婚して一年目に
死んでしまった。

阿笠は、喧嘩の末、相手を殺してしまったチンピラを
捕まえたことがあった。

そのチンピラは傷害致死で二年間、くらいこんでいた
が、出所すると、お礼まいりに阿笠のところに押しかけ
てきた。

阿笠の留守中に訪ねてきて、阿笠の妻の和子に拳銃を
突きつけ、人質にしてマンションの屋上に立てこもっ
た。

チンピラは妙な要求を突きつけてきた。阿笠に、裸に
なって土下座してあやまれ、というのである。それをテ
レビで全国に放映しろ、とチンピラは言った。そうすれ
ば、和子を解放するというのである。

阿笠はチンピラを説得するために単身で屋上にあがつ
た。

説得に失敗したら、相手の要求をのんで、テレビカメ
ラの前で裸になって土下座してもいいというつもりだっ
た。和子さえ無事に返してくれるのなら、どんなことを
してもいいと思った。

和子は阿笠の姿を見ると、

「私は殺されてもいいのよ。こいつを捕まえて」

と言い、拳銃を持っている男の腕に武者ぶりについて
った。

男は引金をひき、銃弾は和子の顔を撃ち碎いた。

阿笠はホルスターからとりだしたスミス・アンド・ウ
エッソンの銃弾を一瞬のうちに男の眉間に叩きこんでい
た。

阿笠の正当防衛が認められて罪にはならなかったが、警察官としては男を射殺したのは行きすぎで、あくまでも逮捕すべきだったという意見が強かった。

阿笠は辞職した。

そして現在のようにフリーのルポ・ライターになったわけだが、本当は彼はまだ刑事を辞めてはいないのである。表向きは、刑事を辞めて民間人になったわけだが、その正体は隠れ刑事なのである。

警視庁では、隠れ刑事ともいうべきシークレット・エージェントをひそかに民間にもぐりこませている。と言っても密偵とかスパイなどとは違う。

隠れ刑事は、一般の刑事以上の強い権限をあたえられている。その一つは、抹殺権ともいうべきもので、場合によっては犯人を彼自身の判断で殺す権限も認められているのである。

従ってこのシークレット・エージェントは下手をする、市民社会にとってきわめて危険な存在となる恐れもあるわけだが、少なくとも現在のところ、まだその弊害は現われていない。

当然、このシークレット・エージェントには信頼すべき優秀な人材だけが、ひそかに選ばれることになる。

もちろんテレビ局の人間も、阿笠礼太郎がそういう隠れた顔を持っていることは知らないのである。

その『フライディ・ドラッグネット』が終ると、阿笠はすぐテレビを消して、もう一度ベッドにもぐりこんだ。

うとうとしかけた頃、電話が鳴った。

ディレクターの近松からだった。

「青木みどりの『あなた、今でも』を聞いたかい」

近松はいきなりそう言った。

フラドラ（『フライディ・ドラッグネット』のことをスタッフの連中はフラドラと呼んでいる）を見たか、と言うのなら分るが、なんで青木みどりが出てこなくちゃならないんだと思いつつながら阿笠は、ええ、聞きましたよと答えた。

「じつはね、今、視聴者から電話が入ってね、あの歌は盗作じゃないかと言うんだよ」

「盗作？ あの歌はもうかなり前から歌われてますよ。今頃になって、なんでそんな問題が出てくるのかな。それに作詞も作曲も一流の人たちですよ。まさか盗作なんて考えられないな」

阿笠はそう言った。

『あなた、今でも』は作詞は桑田正忠で、作曲は福森仁で、二人とも名の通ったベテランである。その二人が、今さら盗作沙汰を起こすなんて、信じがたかった。

「じつはね、その視聴者というのは五年ほどフランスで生活していて、最近、日本に帰ってきたんだそう。パリであの歌を聞いたというんだよ」

「そんなこと、ちっとも不思議じゃないでしょう。日本の歌謡曲をパリで聞くチャンスはいくらでもある筈ですよ」

「ところが、そういうことじゃないらしいんだな。とにかくちょっと調べてみてくれないか」

盗作じゃないかという電話をかけてきたのは、西川信也というインテリア・デザイナーで南青山のマンションの中に友人と共同でオフィスを持っていた。

阿笠は早速、西川をそのオフィスに訪ねた。

「僕はまだ日本に帰って日が浅いので、よく分らないんですが、『あなた、今でも』という歌はいつごろ出たものなですか」

西川は聞いた。

「はやりだしたのはこの半年くらいのあいだですが、一年くらい前にレコードは発売された筈ですよ」

阿笠は言った。

「僕がパリであの歌を聞いたのは一年半くらい前ですよ。歌詞は違いますが、メロディは殆ど同じなんです。作曲家の福森さんがパリであの歌を聞いて、ちょっと手を入れて自分の曲として発表したんじゃないんでしょうかね」

「あり得ないことじゃないかもしれませんが、そう結論を急ぐのは危険ですよ。あなたはパリであの歌を聞いたとおっしゃるが、あれはフランスの歌なんですか」

「いいえ、違います。モンパルナスに『ジジ』という日本人がよく集まるスナックがあるんです」

そのスナックの常連の一人に浅井美弥子というシャンソンを勉強している若い日本人の女がいて、彼女がギターをひきながら歌っていた歌が『あなた、今でも』とじつによく似ているというのである。

「タイトルは『郷愁』というんですがね。詩は彼女自身の作で、これは『あなた、今でも』とは全然、違ってます。曲は彼女の兄さんが作ったんだと言っていました。彼女の兄さんというのは、以前、歌手としてデビューしたことがあるけれども、うまくいかなくて、作曲家に転向したんだそうです」

それ以上、くわしいことは西川も知らないという。

「その兄さんという人もパリにいるんですか」

「いいえ、東京にいらしゃいんです。彼女が作った詩を兄さんに送って、兄さんがそれに曲をつけてパリの彼女に送り返したということらしいんです」

「その曲をパリでレコーディングしたんですか」

「いいえ、そうじゃなくて、彼女はただ勉強のために兄さんに作曲して貰って、自分でギターをひいて歌っている、ということらしいんです」

「しかし、それなら、その兄さんが『あなた、今でも』を聞いて、当然、文句をつけるんじゃないんですか」

「なるほど、そう言われればそうですね」

あるいは、すでに浅井美弥子の兄と福森仁とのあいだでは話し合いがついているのかもしれないと阿笠は思った。

次に阿笠が会ったのは芸能評論家の柳原敬一郎だった。

「『あなた、今でも』という歌が盗作らしいというような噂を聞いたこと、ありませんか」

阿笠はいきなりそういう聞き方をしてみた。あるいは芸能界の内側ではすでに知られた話なのかもしれないと

思ったからである。

「盗作？ それは初耳ですね」

柳原は上半身を乗りだすようにした。阿笠は西川から聞いた事情を話した。

「浅井美弥子という人の兄さんというのは、たぶん浅井弘のことじゃないかな。浅井弘なら、福森さんのところで作曲を勉強していたから、弟子の作品を先生が自分の名前で発表するということはある得ね」

柳原はそう言った。なんだ、そういうことなのかと思ひ、阿笠は拍子抜けしてしまった。

それなら、当然、福森と浅井弘とのあいだには話し合いはついているのだろうし、問題にするようなことは何もないのである。しかし、念のために一応、浅井弘に会ってみようと思った。

「柳原さんにお目にかかってよかった。下手をすると、もう少して勇み足になるところだった。とにかく浅井さんには会うだけ会ってみましょう」

「それは無理ですよ」

「無理？」

「だって、浅井弘はもう死んじゃったんだからね」

「死んだ？ いつです？」

「もう、そろそろ二年くらいになるかもしれない」

「とすると、福森さんが『あなた、今でも』を発表したのは浅井弘の死後ということになりますね」

阿笠が言うと、柳原は頷いた。

もし、福森が浅井弘の死後、無断で浅井の作品を自分の名前で発表したとなると、これはやはり盗作ということになるだろう。

あるいは、浅井の生前、そういう問題に関して二人のあいだになんらかの諒解が成立していたのだろうか。

話し合いがついていて、遺族にレコードの印税や著作権料などが福森のほうから支払われているということも考えられる。

ひょっとしたら、盗作どころか、福森が浅井の遺族の経済的な不安をいくらかでも、やわらげてやるために自分の名前を貸して、浅井の作品を世に送り出した、という美談であるのかもしれない。

それで阿笠は、自分が考えたことを口に出してみた。「少なくともそういう美談はあり得ないでしょうな」

柳原はあっさり阿笠の想像をしりぞけた。

「阿笠さんは浅井弘の死に方を知らないから、そう思うんですよ。彼はガス自殺をしたんです。アパートの自分

の部屋でね」

「自殺ですか」

「しかも、その同じ夜の同じ頃、福森さんの奥さんも同じようにガス自殺をしたんです。自宅でね」

柳原のその言葉は阿笠には、かなり強いショックをもたらしした。

「二人のあいだに何かあったんですか」

「浅井弘は福森さんの弟子として家に出入りしているうちに奥さんと必要以上に親しくなっちゃったんでしょうな。福森さんは自宅のほかにマンションの一室を借りて仕事場にしていましたから、その留守のあいだに奥さんと浅井くんが仲よくなるということは充分考えられます」

「そんなことがあったなんて、全く知りませんでしたね。しかし、福森仁の夫人が自殺したとなれば、当然、新聞や週刊誌がほうっておかないでしょう」

「福森さんのゴルフ仲間に自友党の大物代議士がいて、この代議士先生が押えて回ったようですね」

柳原はにやにや笑いを浮かべた。

「その代議士の名前は分りますか」

「松島さんですよ。松島健作です」

松島健作なら、それくらいの力はある筈だった。

阿笠は福森仁の顔はブラウン管を通して、しばしば見ている。

しかし、実際会ってみると、テレビの画面から受ける印象よりもずっと若々しかった。顔の色つやもいいし、皮膚にたるみもない。もう五十にはなっているのだろうが、精々四十そこそこにししか見えない。

阿笠は、福森を彼が仕事場に行っているマンションのほうに訪ねたのである。

背後に色っぽいスキヤンダルの匂いが漂ってきたので、阿笠は福森に会ってみようという気になったのである。

阿笠は手間をはぶくために、じつに率直な言葉をいきなりぶつけた。

「たいへん失礼ですが、『あなた、今でも』は盗作じゃないか、という投書が局のほうにきたんです。そんな馬鹿なことがある筈ない、とは思いますが、一応、先生のお耳にも入れたいほうがいいということで邪魔にありました」

阿笠はそう言って相手の反応を見た。

「盗作？ 冗談じゃありませんよ。何を根拠にそんなこ

とを言うんです」

福森は自信たっぷりだった。

少しも動揺や混乱の気配は見られない。有力な政治家がついている、という意識が彼を支えているのかもしれない。もし、そうなら、そんな自信は叩き潰してやらなくちゃならない。

「浅井弘さんの作品だという説もあるらしいんです」

「浅井くんのか？」

福森は眼をまるくし、それから笑いだした。

「彼には気の毒だけど、浅井くんは作曲家としての才能は乏しかった。彼に『あなた、今でも』みたいな曲が作れたら、とうの昔に売り出してますよ」

阿笠は浅井弘の妹の美弥子がバリでギターのひき語りをしている、といういきさつを話した。

福森の表情に初めてけわしさが現われた。

「浅井くんは、僕が書いた譜面をひきうつして美弥子さんに送ったんでしょう。恐らく美弥子さんが書いてきた詩というのが、曲に符合したんで、そういうことをしたんじゃないかな。そう言っちゃ、悪いが、浅井くんならやりかねないからね」

恐らく福森の内部に不愉快な記憶がよみがえったのに

違いなかった。

師の妻を盗むくらいだから、曲だって盗むに違いない、福森はそう言いたいのかもしれない。

「先生は美弥子さんにはお会いになったことはありませんか」

「浅井くんのお葬式の時にね、でも、殆ど話はしませんでした」

「『あなた、今でも』が売り出されたのは、浅井さんの死後ですね。美弥子さんは浅井さんの生前、『郷愁』という曲を手に入れてパリで歌っていたということなんです」

「あの曲が売り出されたのは、浅井くんの死後ですが、僕があの曲を作ったのは浅井くんの生前です。あの曲は本当は青木みどりじゃなくて、べつの歌手が歌う筈だったんです。ところが、その歌手が過労から声帯を痛めて、半年くらい休養しなくちゃならなくなった。それでその歌手が回復するまで、あの曲を寝かせておいた。しかし半年経っても復調が思わしくないので、あきらめて青木みどりにふりかえたんです」

福森の言葉は筋が通っている。しかし、筋を通し、辻褄を合わせることは大してむずかしいことじゃないだろ

う。

夫人と浅井の死について、ふれようかどうか、阿笠はかなり迷ったが、やはりふれないわけにはいかなかった。

「立ち入った質問になりますが、奥さんは浅井さんとしてし合わせて死を選ばれたのでしょうか」

できるだけ、ひかえめな言い方をしたつもりだった。それに対して彼が口に出した言葉は、こうだった。

「きみは僕を本当に怒らせる前に帰ったほうがいいんじゃないかな」

福森のその言葉は、阿笠を過去の二つの死の現場に追いやることになった。

福森の自宅と浅井弘のアパートとは同じ目黒区内にあつて、所轄も同じM署だった。

阿笠はM署に出かけて、過去の二つの死をもう一度、掘り返してみた。

さいわい、当時、その事件を担当した刑事はまだM署に勤務していた。沢田という若い刑事で、彼は阿笠礼太郎の名刺に眼を落とした時、その顔に強い感動の色を浮かべた。

「阿笠さんのお名前は存じますよ」